

「琵琶記」と「張協状元」

——南戲の場面配列——

傳 田 あつ子

一

南戲「琵琶記」には先行作品があったことが知られている。陸游の詩に⁽¹⁾、趙家莊の斜陽古柳のもとで盲人の翁が鼓を打ちつつ蔡中郎をうたっていたとあり、この蔡中郎の鼓子詞は、「琵琶記」と題材を一にするものであったと考えられる。おそらくそれより早い時点の温州雜劇、すなわち早期の南戲に「趙貞女蔡二郎」の題名が残されており、これが⁽²⁾「琵琶記」の藍本であったろうと考えられる。

当時の劇作の通例として作者たちは、趙貞女という⁽³⁾大衆の誰もが知悉している話をとりあげて、それに自分たちの新しい工夫を加えているのだが、題材の面だけでなく、形式の面でも予想以上に先行の南戲作品の技巧を踏襲している点が多いように思われる。

残念なことに、温州雜劇の脚本は伝えられていない。そのため、いま「趙貞女蔡二郎」と「琵琶記」とを直接に比べてみることはできない。しかし、同一ではないが、同種の題材を扱う他の南戲作品を検討することで、ある程度その点を探ることができるように思われる。

伝存する南戲脚本のもつとも古いものとして「張協状元」がある。これが、趙貞女と同類の、出世した男が女を捨て

るという題材をとりあげている。

「張協状元」の制作年代は、はじめ青木正児博士によって、おそらく元代の作品であろうとの推論⁽⁴⁾がなされていたが、その後岩城秀夫氏の詳細な考証⁽⁵⁾により、その時期はやゝ溯って南宋の末葉であるとされた。岩城氏は「明代南戲の先蹤をなすもの」として注目されているが、さらにいえば、それが地理的にも南戲濫觴の地である温州で制作、上演されたものであり、いわば本場ものとして、後続作品に一定の影響を与えたということは充分に考えられることである。

この小論では、先行の南戲作品が「琵琶記」にどのような影響を及ぼしているか、従来「琵琶記」が傑作であると評価されてきた理由のうちのいくつかのものは、むしろ先行する南戲作品の中にすでにみられる技巧ないしは方法ではなかったかという予想のもとに、先行作品の代表として「張協状元」をとりあげ、「琵琶記」への影響、継承関係を、主としてその構成面、場面の配列の比較から考えてみることにする。

注

- (1) 『斜陽古柳趙家莊、負鼓盲翁正作場、身死^{一作}後是非誰管得、滿村聽唱蔡中郎。』(『小舟游近村、舍舟步歸』詩其四)
- (2) 徐渭『南詞叙錄・宋元旧篇』：『趙貞女蔡二郎 即旧伯喈棄親背婦、為暴雷震死。里俗妄作也。実為戲文之首。』
- (3) ここでは最終改訂者としての高明を含めて、先行する南戲の伯喈・五娘作品の作者たちをいう。
- (4) 『支那近世戯曲史』六一頁。
- (5) 『温州雜劇伝存考—宋代演劇へのアプローチ—』(『日本中国学会報』第二十八集所収、一九七六年)

二

はじめにあらためて「琵琶記」と「張協状元」の距離、制作年代のへだたりをはかっておこう。

知られているように「張協状元」は偶然発見された『永楽大典』卷一九七七一のものであり、伝存最古の南戲脚本で

ある。同じ一冊の中に収められていた他の二作品「宦門子弟錯立身」、「小孫屠」と比べて、制作年代がいちばん早いものであることは諸家の一致して認めるところであり、前述の岩城氏の推論のほかにも、近年刊行された錢南揚の校注本⁽¹⁾が、「金の亡びた後、宋の亡びる前」に作られたであろう「宦門子弟錯立身」より早く、「アマチュア俳優の全盛時代」の「戯文初期の作品であろう」としている。「宦門子弟錯立身」の曲文中に「張協斬貧女」という戯文名が出てくるし、また「散曲、集古伝奇名」⁽²⁾にも「張叶身榮將貧女忘初恩」のあることが指摘されている。これらが果して永樂大典戯文のものと全く同一の作品であるかどうかはにわかに決めがたいが、ともかく張協をとりあげる南戲作品が早くからあったことがわかる。

「張協状元」はどこで作られ、したがって最初に上演されたか。これははっきりしているようである。脚本中の「燭影搖紅」曲（校注本第二出）で、作者が「九山書会」を自称しており、錢南揚の注にいうとおり、これは永嘉に現在もある地名で、作家組合である書会がその所在地名を組織の名に冠したものであろうとみるのが妥当なところである。さらに冒頭の諸宮調の語り、「滿庭芳」（校注本第一出）でも、「このたび書会では、天下一の評判をとるつもり、東欧の盛事を独占して、……」とあって、当時この地が芝居の隆盛を極めていたことがわかる。東欧は温州の古名である。たゞしその「盛事」の舞台、「張協状元」の人氣は、高明の時代まで変りなく続いたであろうか、南宋末から数えても最低三、四十年の時が経過している。『南詞叙録・宋元旧篇』には張協作品の題名がみあたらないことは、あるいはその上演はやくすたれたことを反映するかも知れない。

「琵琶記」の作者は高明である。高明、字は則誠、浙江温州瑞安の人。その生卒年は以前は必ずしも確定的ではなかった。錢南揚「琵琶記」作者高明伝（上海『大公報』一九四六年十一月原載、『琵琶記討論專刊』所収）は、元成宗の大徳五年（一三〇一）の生れ、七十余で死亡と推定し、⁽³⁾戴不凡『論古典名劇琵琶記』（中国青年出版社、一九五七年）で

は、大徳九年（一三〇五）生れ、明太祖洪武元年（一三六八）以後没⁽⁴⁾としている。没年については従来この説が有力であったが、その後、新資料によって明の成立九年前の至正十九年（一三五九）没とする見解が発表され⁽⁵⁾、以後、中国科学院編の『中国文学史』（人民文学出版社、一九六二年）から最近の張庚・郭漢城主編『中国戲曲通史』（上冊、中国戲曲出版社、一九八〇年）まで、これが定論となったようである⁽⁶⁾。

高明の進士及第は至正五年（一三四五）のことで、したがって彼は四十近くまでを、この南戲盛行の地温州ですごしている。

役人生活のうち何年かを杭州の楊維禎のもとですごしたが、楊から戲曲の執筆をすすめられたということは、やはり高明の方にも平生からこの方面に並々ならぬ関心があったことを推測させる。

至正十二年にいったん杭州を去るが、日ならずして再び請われて官につき、ようやく至正十五年（一三五五）に寧波に退隠した高明は、まもなく「琵琶記」の執筆にとりかかった。その際彼は師黄潛にも激励をうけている。その脱稿はどんなにおそくとも明朝に入ることではない。田藝衡「留青日札」にも、明の高祖朱元璋が、その帝位につく（一三六八年）以前、すでに高明のこの戲文を奇として常々言及していたことが記されている。

さて、「琵琶記」の作者が高明であるということは、これまで疑いない事実としてうけいられてきたのであるが、最近、彭飛・朱建明論文がこれに異議をと⁽⁷⁾なえた。「琵琶記」の作者は高明ではないとするその論拠は、『九宮正始』⁽⁸⁾に載る「琵琶記」の曲文である。『九宮正始』の編者は、天曆年間（一三二八—一三三〇）刊の「元人九宮十三調詞譜」を使用しているが、『九宮正始』が全編で「琵琶記」の曲文一六〇首余を載せる中に、はつきりとこの古譜からとった注記のあるものが十一曲存在する。前述のとおり、高明が寧波に隠退したのは一三五五年のことであるから、彼が「琵琶記」を書く以前に、少くともこの十一の曲はすでに世上に流布していたわけである。彭・朱論文はそこから一気に高

明作説の否定を試みる。従来「琵琶記」高明作をのべる唯一の文献資料であつた『南詞叙録』の高明に関する記述を、時代のへだたりがあつて信憑性にとほしいとしたのである。これに対し徐朔方⁽⁹⁾は『南詞叙録』とほとんど同時期、別個につくられた『寧波府志』(一五六〇年編刊) 卷三十九「高明伝」に同様の記事のあることをあげてこの記載を事実であると認定し、高明はやはり「琵琶記」の作者として認めるべきだとした。たゞし、『九宮正始』の引く「琵琶記」曲にはすべて「蔡伯喈 元伝奇」とその題名が記されているところから、高明改訂今本「琵琶記」の前に、南宋初年に民間で作られた温州雜劇「趙貞女蔡二郎」とはまた別に、南戲「蔡伯喈琵琶記」があつたと解釈し、『南詞叙録・宋元旧篇』の末尾から二番目に並ぶ「蔡伯喈琵琶記」がこの「蔡伯喈 元伝奇」ではないかと推測する。

では、高明はいったいどれだけの改訂を加えたのか、彼自身の手にかかる創作の部分はどれだけあるのか。徐朔方も指摘するとおり、先の十一曲はほぼ今本「琵琶記」の全篇各部分にちらばっているところからみて、その基本構成はほぼでき上っていたと考えられるが、いまはそれ以上詳しく知るすべはない。⁽¹⁰⁾

注

- (1) 『永樂大典戲文三種校注』(中華書局、一九七九年)「前言」。
- (2) 沈璟『南九宮譜』卷四「刷子序」。
- (3) 蘇伯衡の生年から高明の弟高暘の生年を推定し、弟より五歳年長としたもの。
- (4) 劉基が高明に贈った詩からみて、二人は同輩と考えられる。劉基は一三二一年生れ(『明史・劉基伝』)であるから、弟より一歳年長と仮定すれば錢説よりも二人の年令差はちぢまるとして、一三〇五年生れとの推論をたてる。没年は王昶『明詞綜・高明小伝』の「洪武初召修元史、以老病辞帰。」による。『元史』の編纂は一三六八年に始まっている。
- (5) 湛之「高明的卒年」(『文史』第一輯所収、一九六二年)。清の陸時化『吳越所見書画目錄』卷一所収の「題(陸游)晨起詩卷」に、「至正十三年夏五月壬辰、永嘉高明謹誌於竜方」とあり、余堯臣も同じ「題晨起詩卷」のなかで、高明の評を引用し

た後、高明がその六年後、四明（寧波）で死去したと記していることを指摘する。

(6) ただし、銭南揚『元本琵琶記校注』「前言」（一九七八年十二月）は、明初卒としている。

(7) 『琵琶記非高明作考辨』（復旦大学分校校慶二周年科学報告論文集）所収、一九八〇年十二月。未見。以下の内容紹介は、次
にあげる徐朔方論文の記すところによる。

(8) 徐子室・鈕少雅編『彙纂元譜南曲九宮正始』。清初鈔本。民国二十五年刊文奎堂書莊影印本がある。

(9) 『《琵琶記》的作者問題』（『社会科学戦線』一九八一年第四期所収）。

(10) この問題については、考えるべきことが多いが、いまここでは『九宮正始』にのる「蔡伯喈」曲百六十余首は、問題の十一
曲も含めてそのすべてが、実は陸貽典抄本「校鈔新刊元本蔡伯喈琵琶記」にみられるものであることを指摘するにとどめて
おく（文字の異同は問題にすべきほどのものはない）。たゞし陸鈔本および同系統の「新刊巾箱蔡伯喈琵琶記」（嘉靖蘇州坊
刻本）はともに「東嘉高先生編集」と署されている。なお『九宮正始』には「張協 元伝奇」と題するものもあわせて十一
曲載っており、いずれも永樂大典本「張協状元」の曲文との間にさしたる異同のないものである。

三

「張協状元」は、比較的早期の作品であり、その作者は書会の「才人」たちである。その生活意識は観客たち——その
中心は都市の市民層——により近いところにある。この点は「琵琶記」の最終改訂者高明のような、れっきとした士大
夫階級出身の「名公」とははっきり異なってくる。明人の校訂の手が加わっている今本「琵琶記」諸本はさておいて、
比較的古型を伝えている陸貽典鈔本元本「琵琶記」（前節にのべているようにそのどこまでが高明の手になるかははっ
きりしないが）をみても、やはりそこには作品の質のちがい、南戲の発展史における時期のちがいというようなものが
感じとられる。このような内容面の差は忘れてはならないことであるが、いまはそれはテーマではない。

「張協状元」の構成に言及するに先立って、一応あらすじを記しておく。

西川の人、張協は科挙受験のため汴京へいそぐ途中、五雞山で山賊に襲われ、負傷して古廟へ逃げこむ。そこには身寄りのない貧女が住んでおり、彼女の親身の介抱で、張協は全快する。日頃からこの貧女の面倒を何くれとなくみていた近所の李氏夫妻が仲人をかけて出て、二人は夫婦となる。

枢密使、王徳用の一人娘勝花は今や娘ざかり。王夫人は婿えらびに心をくだしている。貧女の工面によって上京かった張協は状元に及第、早速白羽の矢が立ち婿にと所望されるが断る。これを苦にして勝花は遂に悶死してしまう。

一方、夫が状元に及第したことを知って、はるばる京を尋ねた貧女に、張協は現在の身分ちがいをはたてに会おうとせず、門番に命じてすげなく逐いかえす。乞食をしながら貧女は故郷へかえる。

梓州の僉判に任ぜられた張協は、赴任の途中で五雞山を通りかかる。たまたま山あいであつて茶つみをしていた貧女に不実をなじられ、無情にも斬りすてる。幸い傷は浅く、李氏夫妻の手厚い看護により養生の日々を過ごしているとところを、梓州通判に任じられて赴任する途中の王徳用が目にとめ、わが娘勝花の面差しを貧女にみて、養女として任地へ伴う。王徳用は張協のため悶死した娘の怨みを胸に秘め、自分から願い出て、張協の上司として梓州へ転任したのであった。

梓州についた張協は、つづいて着任した王徳用の前に挨拶に出たが相手にされない。迫害をおそれた張協は譚節使に仲立ちをたのみ、そのとりなしでようやく許される。王徳用はなき娘のかわりにとあらためて貧女を張協の妻に与えて団円となる。

作品の構造をみるにはやはり分“出”(齣)構成を知る必要がある、「琵琶記」への影響を考える必要上、あわせて両者を対照した表を掲げる。

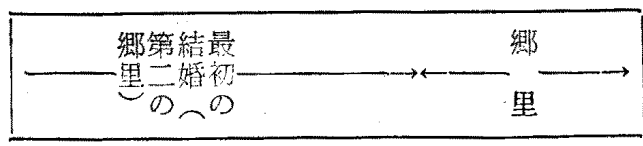
知られているとおり、『永楽大典』本戲文は分出の標出をしていない（このことが、この本の古さを示している）が、
 錢南揚校注本が閲読の便宜をはかつてつけた分出の番号とその内容の提要をそのまゝ使用することとする。

「琵琶記」の方は陸貽典抄本によるが、これもやはり近刊の錢南揚校注本の分出と内容提要を使用する。出番号は「張協狀元」は①②……、「琵琶記」は(1)(2)……で示す。

△張協狀元▽

- ① 開場 諸宮調張協
- ② 断送燭影搖紅 張協言志
- ③ 貧女困守古廟
- ④ 張協円夢
- ⑤ 張協辭親
- ⑥ 李大公提携貧女
- ⑦ 張協行路
- ⑧ 客商遇盜
- ⑨ 張協被刦受傷
- ⑩ 張協古廟避難
- ⑪ 小二担物与貧女
- ⑫ 大公資助張協
- ⑬ 勝花自叙
- ⑭ 張協向貧女求婚

序幕



郷里

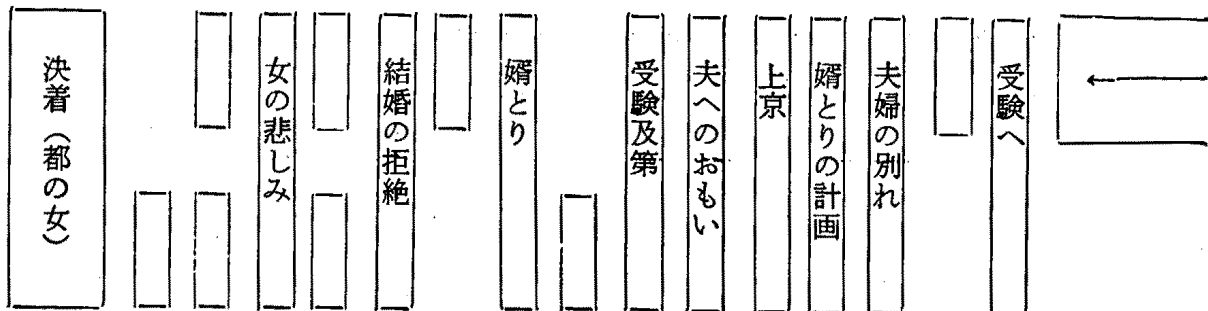
都の女の登場

△琵琶記▽

- (1) 報告戲情
- (2) 蔡宅祝寿
- (3) 牛小姐規勸侍婢

「琵琶記」と「張協狀元」

- ⑮ 王夫人關心勝花婚事
- ⑯ 李大婆為媒張協成婚
- ⑰ 王夫人擬在榜下招親
- ⑱ 張協擬入京應試
- ⑲ 貧女借路費
- ⑳ 貧女被張協打罵
- ㉑ 王府計議勝花婚事
- ㉒ 張協赴京
- ㉓ 貧女思夫
- ㉔ 張協應試
- ㉕ 王府預備贅狀元
- ㉖ 貧女託小二買登科記
- ㉗ 張協拒接絲鞭
- ㉘ 小二買登科記
- ㉙ 勝花傷感
- ㉚ 貧女知張協中狀元
- ㉛ 張協自負
- ㉜ 勝花氣死



- (4) 蔡公逼伯喈赴試
(5) 伯喈夫妻分別
(6) 牛相教女
(7) 伯喈行路
(8) 趙五娘憶夫
(9) 新進士宴杏園
(10) 五娘勸解公婆爭吵
(11) 牛相奉旨招婿
(12) 伯喈拒婚
(13) 牛相發怒
(14) 牛小姐愁配
(15) 伯喈辭官辭婚不准
(16) 五娘請糧被搶
(17) 伯喈允婚
(18) 伯喈牛宅結親

③③ 貧女入京尋夫

③④ 張協告戒門子

③⑤ 張協驅逐貧女

③⑥ 張協欲殺貧女

③⑦ 貧女乞食回鄉

③⑧ 大公大婆思念貧女

③⑨ 貧女回古廟

④① 張協赴梓州任

④② 張協殺貧女未遂

④③ 王德用挈家赴梓州任

④④ 貧女悲歎

「琵琶記」と「張協狀元」

転回)

妻の処置 (悲劇)

妻の処置 (“喜劇”)

妻の上京

郷里と都の対比

①⑨ 蔡婆埋怨五娘

②① 五娘吃糠

②② 伯喈彈琴訴怨

②③ 五娘侍奉公病

②④ 伯喈思家

②⑤ 五娘剪髮売髪

②⑥ 拐児脱騙

②⑦ 五娘葬公婆

②⑧ 伯喈牛小姐賞月

②⑨ 五娘尋夫上路

③① 牛小姐盤夫

③② 牛小姐諫父

③③ 五娘行路

③④ 牛相派人接伯喈家眷

③⑤ 五娘到京知史行踪

③⑥ 五娘牛小姐見面

③⑦ 五娘書館題詩

③⑧ 伯喈五娘相会

④④ 王徳用経五雞山

④⑤ 収貧女為義女

④⑥ 張協上任

④⑦ 王徳用到任

④⑧ 張協參見王徳用被屏

④⑨ 王徳用決心禁持張協

⑤① 張協請譚節使和解

⑤② 王徳用允婚

⑤③ 譚節使回覆張協

⑤④ 張協貧女団円

団円への手続 (“喜劇”への

団円への手続

決着 (妻)

団円

③⑦ 張大公掃墓遇使

③⑧ 伯喈夫婦上路回郷

③⑨ 李旺回話

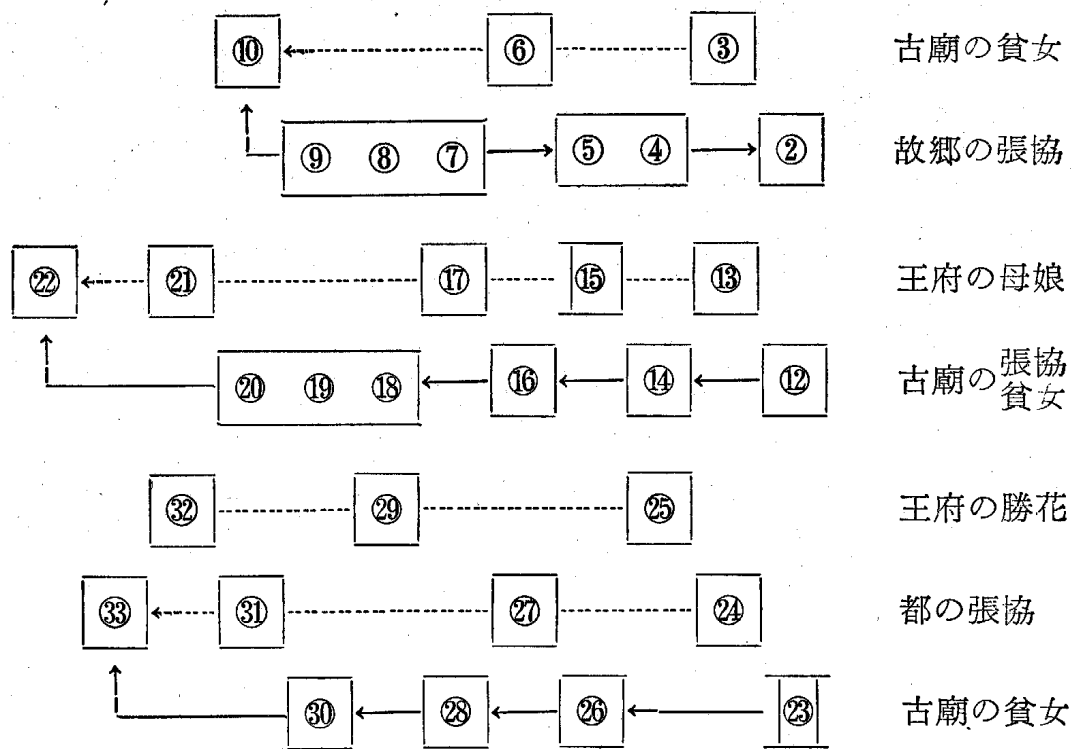
④① 廬墓

④② 牛相出京宣旨

④③ 旌表

上段「張協状元」と下段「琵琶記」と両者のストーリーにはかなりの違いがあり、当然それは構成の大枠にも反映している。最初から夫婦としてある伯喈五娘は、(4)で早くも受験への旅立ちとなるのに対して、張協貧女は、まず出会って結婚するまでの②~⑩があつて、⑩でやっと(4)と一線に並んで、あらためていわば第二の郷里ともいふべき五雞山の古廟からの出立となる。また伯喈が牛氏を妻とし受け入れざるを得なかったのに対して、張協は勝花を拒否し、さらには妻の貧女をも捨てるため、それを転回して団円にもちこむまでの手続き④①~④③がかなり冗長になる。

このような差異があるにもかかわらず、両者はまたよく似かよっている。例えば受験のための別れ(②①、(5)、再婚の拒否(②②、(12)、妻の上京(③③、(28))というようなストーリーの結節点で、個別に同内容の出ができるのは同類の題材であるため当然としても、注意すべきは、複数の出の連続で全く同じものがみられることである。最もめだっている



のは、受験への出発から再婚の拒否までの部分(②①)と(②⑨、⑥)と(④)の配列であろう。また、比較的早い出で一度、都の女が登場してくる伏線の配置も、構成方法上、意味のある類似としてあげることができる。

「張協状元」では、まず張協の故郷の場面(②④⑤)が並ぶ中に貧女の廟の場面が(③⑥)ほど交替に演じられるようにくみこまれ、(二方の出の番号・題目を一字下げて示す)、張協の旅立ちによって場面は後者に収束する(⑩)。

同じ型が、次には古廟の張協貧女(⑫⑭⑯⑰)と都の勝花母娘(⑬⑮⑰)の配列にもみられる。やはり主人公の応試上京(②②)で、場面の流れが京へ移動する。

留守を守る古廟の貧女(②③②③③)と及第した都の張協(②④②⑦③①)の互出から貧女の上京(③③)も同様であるが、ここではさらに勝花の結婚問題(②⑤②⑨③②)もからまって、張協をはさんで貧女と王府との対照を意識した三重構造となっている。

このような場面の転換は、一見目まぐるしく、あるいは思いつくままの気まぐれの所為と受けとられるかもしれないが、実際はよく計算された構成であると考えられる。一場一場は、比較的短い単純

なものだが、間に伏線として別の対照的な場面が組みこまれることで、地理的な広がりをもって劇的效果が高められる。観客は現に演じられている人物のむこうに、もう一人の人物を常に意識し、そのことが間接的に眼前の人物の描写に深みを与える作用として働く。観客は自分のイメージをふくらませながら、次の場面をまちうける。

これは、一種の舞台進行の歯車組織を形成している。そして一出の長短が自由にできる歌曲形式をもつ南戯に特徴的な手法ではないかと思われる。長尺の演し物に観客をあきさせないために、南戯の作者たちが日々舞台をおして観客と接する中で工夫し編み出してきたものである。

このような、時間の流れにあわせて異なる場所の場面を交互に組みこんでいく構成法は、「琵琶記」でも生かされている。すでにふれた第三出で早々と京の牛小姐を登場させるのもその一つだが、伯喈の出立から受験及第の間に(5)(7)(9)(11)、故郷の五娘が点出する(8)(10)のもそれである。

このあと、やむを得ぬ仕儀とはいえ、伯喈が牛宰相家に婿入りする。類型のストーリーならば、今度はおき去りにされた五娘が京へ夫をたずねていく段に進むのであるが、「琵琶記」ではやゝ異なった筋立てをみせる。ただちに五娘の出発とはならず、その前に全四十二出中の十出(18)(27)というかなりの場数をとって、故郷での五娘の苦勞が描かれる。「琵琶記」で二つの場所の互出平行手法の最も目立つのはこの部分である。結婚して牛府に入った伯喈(15)(17)(18)(21)(23)(25)(27)と、故郷で留守を守る五娘(16)(19)(20)(22)(24)(26)とが、校注本の分出でみてもほとんど一出おきに交替する。その間、妻の窮状と夫の栄達とが交互に描かれることで、陰陽ともに色濃く現出して相乗効果をあげている。

「琵琶記」が従来傑作として賞されてきた理由の第一にあげられるのが、「琢句の工、使筆の美なること⁽³⁾」として、第二は「構成の妙」であろう。そこでまずいわれるのは常にこの洛陽の優雅と陳留郡の悲慘の対比である。呂天成「曲品」を引いて青木正児博士は次のように言っている⁽⁴⁾。

金本四十二齣

古本は四十三齣

其の布置の法は蔡宅と牛府との光景を交互に演出し、富貴と貧賤とを対照して観者の同情

を一しは趙氏に集めしめ、一面に於ては蔡家生活の悽慘なるを調節するに牛府生活の安楽華麗なるを以てし、観者をして酸鼻を極めざらしめ、又往々滑稽場を挿演して観者の頭脳を休息せしむ。関目布置甚だ穩貼なり。

ここでは、交互の配列はもはや単に一方が他方の伏線であるという役割をこえて、二つの世界を対比することが主目的となっているようである。

作品全体の構成からみても、この部分は「張協状元」に対応する部分を見出せない独自のストーリー展開となっている。

この種のストーリーの類型としては、夫を京へやったあとの妻は、しきりにその身を案じ受験の結果を早く知りたいと願ひ、一面でまた夫の背心へのおそれを訴えるのが普通である。「張協状元」でも②③、②⑥、②⑧、③⑩にそれがみられる。ところが「琵琶記」ではわずかに②④に対応する(8)があるだけである。そしてこの二つの場所での生活が平行するままで進行する。

このストーリーが少々現実味に欠ける面のあることは、すでに早く明人たちが指摘している。臧懋循は「陳留と洛陽では、さして隔りがあるわけではないのに、なにかという万里関山のかなたの如くいう」⁽⁵⁾といふ、清の毛声山も「この世の中にどこに息子が状元及第して三ヶ月になるのに、身内がそれを知らないなどということがあろうか」という世の批難の語を伝えている。⁽⁶⁾

現代における「琵琶記」の解釈の一つとして、郷里にのこされたものたちの悲慘な境遇が、よく元代の農村の現実を写しており、それが評価されるべきだとする論がある。⁽⁷⁾五娘の懸命な努力にもかかわらず、伯喈の父母は相ついで餓死するのであり、そこには異民族支配下の暗黒の社会状況がいつわりなく描き出されているとするものである。

しかし、伯喈五娘の物語で時代の悲慘さを写すことそれ自体は「琵琶記」がはじめてしたことではない。事柄だけでいうなら、温州雜劇でも同内容の悲慘さは、語られていたようである。⁽⁸⁾

「琵琶記」の他にぬきんでた処は、やはりその描写のうまさにある。そのストーリーにやゝ難があるにもかかわらず、五娘の悲しみが眼前の舞台をみるものの心をとらえて離さないのは、やはりこの平行対比の構成の生み出す効果である。それは、時代をへだてた現代の読者の心にも訴えかける。

二つの場所での別個の事件の進行を、細分して交互にくり出すのは、南戯でこそ可能な、最も南戯的な手法である。「琵琶記」も明らかにその方法を活用している。たゞ「琵琶記」はそれを単なる伏線の設定にとどまらず、意識的に陳留と洛陽の生活の対比に活用して、二つの世界の描写にコントラストをつけたのである。この点は先行の技巧の継承援用にとどまっていなかった作者（たち）の工夫として評価されるべきであろう、そのために「関目布置」にいさゝかの齟齬をきたしてもである。

先にもふれたとおり、いまわれわれが読む「琵琶記」は、その構成の大略が、高明が四明の樂社に隠退して劇作にとりかかったといわれる以前に、すでにできあがっていたらしい。『九宮正始』「蔡伯喈」の天曆年間の古譜から引いたと注記がある十一曲の中には、陸貽典鈔本「琵琶記」の「第十九出 蔡婆埋怨五娘」および「第二十六出 五娘葬公婆」にみられるものが一曲ずつ含まれている（その文言にほとんど異同はない）。陳留郡と都を互出するこの部分の場面配列も、すでに天曆の時点で組みあがっていた可能性は大きい。とすればこの対比構成を編み出した功績もまた、文人高明にはなく、その汗で南戯の隆盛を築いた無名の書会作家と俳優たちに帰せられるべきものとなる。

注

(1) 目次頁にある。次項も同じ。

(2) 『元本琵琶記校注』(上海古籍出版社、一九八〇年)

(3) 王世貞『芸苑卮言・附録』

(4) 『支那近世戯曲史』二二四頁。このあとさらに、「明の呂天成之を評して『其詞の高絶なる処は布景写情に在り、……串挿甚だ局段に合し、苦楽相錯し、具さに体裁をみれば、師とす可く法とす可くして、而も及ぶ可からざるなり。』」曲品 卷下と曰ふものはを得たり。」と続く。このほかにもこの種の評は多い。最近のものではたとえば、王季思・董善因・焦文彬「《中国十大古典悲劇集》前言」(『文学評論』一九八一年第四期)がこの点にふれ、悲しみと喜び、出会いと別離、勝者と敗者、動と静、重厚さとユーモア、そして貧と富……というような対照的な描写によって悲劇の芸術効果はより一層高められるといっている。しかし『支那近世戯曲史』が単に対比による効果を指摘するにとどまらず、観客の側の感受の調節にも言及しているのは他を超えているところである。

(5) 「玉茗堂伝奇引」

(6) 「第七才子書琵琶記・総論」。たゞし毛声山自身は「琵琶記」を指弾する立場にはなく、高明にかわって弁解する文章の中の語である。

(7) 前掲『中国戯曲通史』(上冊、第三章第四節二)など。

(8) 京劇「小上墳」(『戯考』第四冊所収)の中でうたわれる要約された伯喈五娘のストーリーでも、「一双爹娘都餓死」となっている。結末は伯喈が雷にうたれて死ぬことになっており、「南詞叙録」に記録される温州雜劇のそれと同じである。

〔補注〕 最近上梓された錢南揚『戯文概論』(上海古籍出版社、一九八一年三月)は、その形式を述べる章で、戯文の場面配列について論じて次の三点をあげている(一七四—一七六頁)。まず役者の出番を平均化して負担がかたらないように配慮しなくてはならないこと(たとえば主役と脇役、あるいは男の主役と女の主役を別々に場面をわけて登場させるというように)、次ににぎやかな場面を静かな場面を交互におくように留意しなければならないこと、そしてはじめの数齣で主たる役者でできるだけはやく登場させてしまふべきであることの三点である。例として「張協状元」の第二、六齣(出)においてすでにこ

これらの点が留意されていることを指摘している。負担への配慮は大切なことである。しかし、これは役者の肉体的条件という、いわば負の制約から発する工夫である。いたずらな平均化はその作品の焦点をぼかすだけだろう。小論は南戯の場面構成を、その積極面においてとらえようとしたものである。